

エデンの園の「四つの川」

— 創世記 2 章 10 - 14 節における地誌的情報が有する文学的機能 —

岩 寄 大 悟

はじめに

創世記 2 章 4 節から 3 章 24 節において語られる「エデンの園」物語において、神ヤハウエは土地を耕し守るために人（ハアダム）を塵（アダマ）で形作り、鼻に命の息を吹き込んで生ける者とした後（7 節）、エデンに園を設けて、そこに人を置いた（8 節）。さらに神ヤハウエは、園に善悪の知識の木と命の木を含むさまざまな木々を生えさせた（9 - 10 節）。そして続く 11 - 14 節にて語り手は、これまで語ってきたようなヤハウエの行動ではなく、次のようにエデンから流れ出る「四つの川」に関する地誌的な情報を叙述する¹。

（10 節）川がエデンから出て行き、園全体を潤していた。そこから分かれて四つの支流²になっていた。（11 節）第一の名はピションで、ハビラ全地を巡るものである。そこには金〔があった〕。（12 節）その地の金は良く、そこではブドラフとショーハム石〔があった〕。（13 節）第二の川の名はギホンで、クシュ全土を流れるものである。（14 節）第三の川の名はヒデケルでアシュルの東³を流れるものである。第四の川はペラトである。

この記述について、たとえば H. Ryle が「これはほぼ確実に後代の挿入である。これは思考の連続性を遮る」（32）と述べるように、元来の物語に対する二次的な挿入である（城崎：3、関根正雄：94、関根清三：310、フォン・ラート：117 他）とされ、あるいは、たとえば G. フォン・ラートが「この断章は、これから始まろうとするドラマにとって何の意味も持たない」（117）⁴と述べるように物語における位置づけや機能については軽視されてきた。しかしその一方で、このエデンに関する地誌的情報

1 本稿での聖書翻訳は拙訳であり、〔 〕内を補った。

2 原語では「頭」。

3 あるいは「前」。これについては後述 2 - 1. 7) で扱う。

4 この描写について、他にもたとえば城崎進が「この部分は全体の主題についてほとんど固有の役割を持っていない」（3）と、関根正雄が「深い意味があるわけではない」（95）とそれぞれ述べている。

を基に具体的な位置を言語学的・文献学的・考古学的側面から確定しようとする研究が多くなされてきた⁵。

本稿では、まず研究史として特に重要な三人の研究を概観し、次に「四つの川」に関する地誌的情報の記述と、この記事に関連する語のヘブライ語聖書での含意を検討する。そして、これらを踏まえて、「エデンの園」物語における地誌的情報が物語の読みに与える機能について考察する。

1. 研究史

まず、エデンの園から流れ出る「四つの川」に関するこれまでの主要な見解を確認する。註解書でもこの10－14節は詳論されることが少なくない⁶が、四つの川の同定以外に関心を寄せる研究はごく少数である。ここでは Speiser、Gispén、Raddy というこの箇所を扱う重要な三人の見解を見ておく。

1) E. A. Speiser “Rivers of Paradise” (初出：1959年、再録：1967年)

この論文は、創世記2：8以下の記述について、以下の8項目を順次論じていくことで、ピションとギホンを実際の川と同定しようとしている。①聖書の記述が明確な起点となる地点を持っているか否か(24)、②古代人は地理に関する変わった感覚を有していたというしばしばなされる議論(25)、③聖書のパラダイスについての地理的な困難の最大の原因としてクシュの同定の問題(25－26)、④ピションとギホンの川の名前が混乱を加えるのみであること(26－27)、⑤クシュの位置が復元された場合のエデンの理論上の限界が扱いが簡単な空間となること(27－29)、⑥聖書のテキストにはシュメールの地と伝承を明らかに指す二つの意味論上の痕跡の指標を含んでいること(29－30)、⑦エデンの園を探し出す際にペルシャ湾を離れてさまよう必要

5 古代のものとして、フラウィウス・ヨセフスによる『ユダヤ古代誌』1. 38－39がある(41－42)。聖書学による先駆的研究としては、F. Delitzschによるこの問題を扱った300頁以上に及ぶ大部な書物がある(Delitzsch, Friedrich 1881 *Wo lag da Paradies? Eine Biblisch-Assyriologische Studie*. Leipzig: J. C. Hinrichs'sche Buchhandlung.)。さらに、中近東地域の最初期の考古学では発掘から「エデンの園」を確定しようとする試みが多くなされた(Cline: 71)。現在でもそのような「発見」が紹介されることがあるが、そのようなものについて、E. Clineは「最初期の先人たちの好奇心をそそった聖書考古学における元来の疑問の一部である。それらは今日でも何度も呼び起こされているが、聖書考古学により答えられるものではない」と断じてなく、「毎年、「科学的な」探検隊がエデンの園〔中略〕を探すために乗り出す。これらの探検隊は誠実だが誤った方向へ導くアマチュアや強欲な信用詐欺師による偏向させた話を熱心に受け入れる騙されやすい信者たちにより献金された並はずれた額の援助をしばしば受けている」と厳しく批判している(71)。

6 たとえば、Ryle(47－48)は「楽園の川についての註記」として、註解とは別に扱っている。また Skinner(62－66)は「エデンの位置」という註記で詳細な議論を展開している。

がないこと、⑧ピションとギホンを同定する際にこれらの情報は何を有しているのか(31 - 33)。これらを順に論じた上で、「したがって、聖書のエデンの園の物的な背景は事実であることで下絵されている」と主張する(34)。

2) W. H. Gispen “Genesis 2: 10-14” (1966 年)

この論文は、創世記 2:10 - 14 に関する釈義的な考察である。この中で Gispen は、オランダ語とドイツ語の文献を中心にして、幅広く、聖書ヘブライ語の辞書類、創世記の註解書類、雑誌論文、この箇所に関する単著での研究を要約するのみならず、アッシリア学での諸説を紹介しつつ、この箇所についての議論を展開している。

この論文の末尾では、検討した各表現の意味を踏まえ、この單元についての結論として、四つの川を「理想の産物」とする Rabaat の見解に言及し、それを批判して、四つの川が「エデンの園についての事実在即した情報を与える」ものだと主張している(124)。

3) Y. T. Raddy “The Four Rivers of Paradise” (1982 年)

Raddy はこの論文で、創 2:10 - 14 の記述に関して、20 点にも及ぶ解釈上の難点を列挙し、この箇所について議論を展開している。その際に、聖書学の知見のみならず、ユダヤ教の著作(タルグム・ヨナタン、ミドラッシュ、ラシやサアディア・ガオン、イブン・エズラなど)の見解も参照することが、この Raddy の研究の大きな特色である。結論として、Raddy は川の規模が不釣り合いであるのはユーモアがあり、ハビラとクシュの地が意図的にあいまいにされており、古代世界での両端にある国が等しく適用可能であると主張する(31)。また、この聖書記事が単なる神話の残滓でも後代の付加でもなく、創世記にとって絶対必要で不可欠なものだと論じている(31)。

2. エデンの園の「四つの川」の地誌的情報と関連する語句のイメージや含意

この「四つの川」をめぐる地誌的情報と、それに関連する諸イメージを検討する。ここでは、まず 10 - 14 節に使用される川の名称や流域地域の名称を検討し、次にこの箇所で言及される産物を扱い、最後に「四つの川」に関連するさまざまなイメージや含意について見ていきたい。

2-1. 10 - 14 節での地名について

まずこの箇所で言及される「四つの川」に関する地名について確認する。先述のように、エデンの外で四つの川に分かれているが、それらの名称は 1) ピション、2)

ギホン、3) ヒデケル、4) ペラトと呼ばれる。このうち、4) ペラト以外の三つには流域の地名が併せて述べられており、5) ハビラ全土、6) クシュ全土、7) アシユルの東側をそれぞれ流れていると描写される。これらを順に見ていく。

1) ピション (פִּישׁוֹן)

ヘブライ語聖書中ではこの箇所にもみ見られる名称である (Skinner : 60、Gispén : 117、Westermann : 296、Wenham : 65 他) が、旧約外典シラ書 24 : 25 – 27 には 11 – 14 節に言及される四つの川、およびナイル川とヨルダン川と並んで言及される。この川の名前は「跳ねるもの」を意味すると考えられる (月本 : 91)。研究者によっては、現実の大河の名前ではない (月本 : 91) とする見解の他、①インダス川、②ガンジス川、③ナイル川、④アラビアの川、⑤メソポタミアの川もしくは運河、⑥ティグリス川の支流、⑦アラビアを囲う海 (ペルシャ湾と紅海) などさまざまなもの指すと考えられてきた (城崎 : 3、Gispén : 118 – 119、Wenham : 65 他) が、具体的にどの川を指すのかは不明である (Gispén : 117、Wenham : 65、関根清三 : 309)。

2) ギホン (גִּיחוֹן)

この名称は、ヘブライ語聖書では川の名前としてはこの箇所以外には用例がない (Ryle : 33、Westermann : 296、Sarna : 20 他)。しかし、これはエルサレムにある泉の名前として知られる (たとえば王上 1 : 33、Skinner : 61、Gispén : 119、Sarna : 20 他)。これは「湧出」を意味すると考えられる (月本 : 92)。

この川はナイル川と同定する解釈者が多い (Ryle : 34、Skinner : 61、Gispén : 121 他)。ただ、ヘブライ語聖書でナイル川は多くは「イエオル (יְאוֹרִי)」(たとえば創 41 : 1)、あるいは「シホル (שִׁיחֹר)」(たとえばイザ 23 : 3) と呼ばれる (Ryle : 34)。また、ユーフラテス川と同じく、ナイル川はヘブライ語聖書中で良く知られた川である (Ryle : 34、Skinner : 61)。このため、もしナイル川を指しているとするならば、なぜ他で知られない名称で呼んでいるのか不明である (Skinner : 61)。フォン・ラートは理由は明確にしないが、ナイル川はあり得ない (118) として、ナイル川のヌビアでの支流と同定する (118)。このように、この川についても具体的にどの川を指すのか (Wenham : 65、関根清三 : 310 他)、あるいは、現実の大河の名前ではないのか (月本 : 92)、不明である。

3) ヒデケル (חִדְקֵל)

この名称はヘブライ語聖書中に 2 回しか使用されず (CDCH および Even-Shoshan 参照。Ryle : 34、Skinner : 61 他)、ここ以外ではダニ 10 : 14 に見られるのみである

(Even-Shoshan を参照。Ryle : 34、Skinner : 61、Gispén : 121 他)。また、近代諸訳では「ヒデケル」と音訳するもの⁷と、「ティグリス川」と訳出するもの⁸に大きく分かれる。ただ、この川がティグリス川を指すことについて、研究者は広く一致している (Skinner : 61、Gispén : 121、Wenham : 66 他)。

4) ペラト (פֶּרַת)

この語はヘブライ語聖書中に 18 回使用される (CDCH を参照)。近代諸訳ではごく少数は「ペラト」と音訳する⁹が、大多数は「ユーフラテス川」と訳出している¹⁰。この川が「ユーフラテス川」を指すことについて、研究者は広く一致している (Ryle : 34、Gispén : 121、Westermann : 298、Wenham : 65 他)。

この川は、しばしばヘブライ語聖書ではユーフラテス川は「特に抜きんでて (*par excellence*) 川というもの」だとされる (Ryle : 35、Skinner : 62)。そのため、たとえば、出 23 : 31、王上 5 : 1¹¹、詩 72 : 8、80 : 12、イザ 8 : 7、ゼカ 9 : 10 では「川」(もしくは「大河 (הַנְּהַר הַגָּדוֹל) 」) という表現がユーフラテス川を指す語として使用されている (Ryle : 35)。

この川には流域地域名も産物の言及もない。これは①周知であることを前提にしており付け加える必要がなかった (Westermann : 298、Sarna : 20、Hamilton : 170 も併照) とも、②特段付け加えるものがなかった (Westermann : 298) とも考えられる。

5) ハビラ全域 (כָּל-אֶרֶץ הַחִוִּילָה)

ハビラ (חִוִּילָה) は①人名としても②地名としても使用され (Hamilton : 169)、ヘブライ語聖書でこの語が使用されるのは 7 例である (Cassuto : 118。Even-Shoshan は地名と人名を区別し、前者を 3 例、後者を 4 例とする)。この語は「砂地」を意味する (城崎 : 3、Sarna : 19、Gispén : 118 も併照) とされ、古代においてアラビアが金の産地として有名であった (Ryle : 33) ことを踏まえて、地域名としてはアラビアを指す (Ryle : 33、城崎 : 3、Wenham : 65 他) とされることが一般的である。しかし Sarna はこの語の用例を、①エジプトを指すものと、②アラビアを指すものに二分しており (19 - 20)。それによれば、この語の用例のうち、①創 10 : 7、創 25 : 18、サム上

7 口語訳、岩波訳、KJV、ZB、DRB、LSG 等。

8 協会共同訳、新共同訳、CEB、NRSV、EIN、GuNB、SG21、TOB 等。

9 岩波訳、月本、関根清三、Chouraqui 等。

10 協会共同訳、新改訳 2017、CEB、NRSV、EIN、LUT2017、LSG、TOB 等。第三の川「ヒデケル」を「ティグリス」としない翻訳でも、ほぼすべての翻訳がこの川は「ユーフラテス」としている。

11 近代諸訳では、口語訳、新共同訳、協会共同訳、CEB、NIV、NJPS、NRSV、RSV、EIN、GuNB、LUT2017、BFC、PDV、SG21 などが「川」という語をユーフラテス川として訳出している。

15：7、代上1：9がエジプトを指すものとして、②創10：29、代上1：23がアラビアを指す(354、註17)としている。また、定冠詞が付いて用いられるのはこの箇所のみである(Gispén：117、Hamilton：169他。Even-Shoshan参照)が、その理由は不明である(Hamilton：169)。

6) クシュ全域 (כּוּשׁ אֶרֶץ כּוּשׁ)

ヘブライ語聖書でכּוּשׁが使用されるのは30例である(CDCHおよびEven-Shoshanを参照)。近代諸訳では「クシュ」と音訳するものが大多数¹²だが、ごく少数が「エチオピア」として訳出している¹³。この名前が指す地域は複数あり、①エチオピア(関根正雄：94)、②南部エジプトのヌビア(月本：92)、③アラビアのミディアン(城崎：3)を示すという可能性が考えられてきた(Gispén：120、関根清三：310参照)。このようにこの地名には、候補となる複数の可能性があり、一箇所の地域に絞り切れないのである。

7) アッシュルの東側 (קְדֻמָּה אֲשׁוּר)

ヘブライ語聖書でこのאֲשׁוּרという語が使用されるのは150例である(CDCHおよびEven-Shoshanを参照)。聖書ヘブライ語では、アッシュルは①アッシリア全土、②アッシリアという名称の由来となった古都アッシュルの両者を指すのに使用される(Gispén：122、Wenham：66、Sarna：20、Hamilton：170他)。ここでは町を指す(Cassuto：121、関根正雄：94、Hamilton：170他)と考えられている。この古都アッシュルがアッシリアの中心地であった時期から、前1400年までの古い時期にこの部分の歴史的成立を想定する研究者もある(Skinner：62、Gispén：122－123、Westermann：298、Hamilton：170を参照)。

また東側と訳した語קְדֻמָּהは、①東側のほかに、②前を意味する(Ryle：34、Wenham：66、Sarna：20、Hamilton：167他)¹⁴。これはヘブライ語聖書では日の出る東を中心に方角を決定しており、同じく「東」を表わすמִזְרָחでも、同様に「前」をも意味している。ただ、近年の聖書ヘブライ語に関する辞書類の中には、קְדֻמָּהやמִזְרָחが指す東と前という2つの意味を別の語だと判断するものもある(たとえばCDCHなど)。

12 協会共同訳、CEB、NRSV、EIN、LUT2017、LSG、TOB等。

13 KJV、RNJB、SAC、VIG等。

14 主要な聖書の近代諸訳ではJPSがこの訳を採っている。

2-2. 「四つの川」の産物について

次にこの 10 - 14 節で語られる産物について検討する。この産物はすべて第一の川であるピションでとれるものと記されており、具体的に「ベドラハ」「ショーハム石」「金」の三つである。これらを順に見ていく。

1) ベドラハ (נֶדְרָה)

この語はヘブライ語聖書中に 2 回言及される (CDCH 参照)。聖書の近代語の諸翻訳を概観すれば、そのまま音訳するもの¹⁵のほかに、①ブドラク¹⁶、②ブドラク香¹⁷、③香り高い樹脂¹⁸、④琥珀の類¹⁹という訳が見られる。

他の唯一の使用例は民 11 : 7 であり、そこでは「マナ」が比較されている (Ryle : 33、Wenham : 65)。このことから、良く知られた物体のようである (Ryle : 33、Skinner : 60、Sarna : 20 他)。しかし詳細はよくわからない (Ryle : 33 参照)。

この語は、古代から①宝石類、②貴重な樹脂のいずれかを指すと考えられてきた (Cassuto : 120、Wenham : 65) が、現代の研究者は芳香性の樹脂と考える研究者が多い (Westermann : 297、Wenham : 65、月本 : 91 他。CDCH も同様)。

2) ショーハム石 (אֶבֶן שֹׁהַם)

この石はヘブライ語聖書中に 11 回言及される (CDCH および Even-Shoshan 参照) が、実際にいかなる石と同定されるのか、長らく論じられてきた。聖書の近代語の諸翻訳を概観すれば、そのまま音訳するもの²⁰のほかに、①縞瑪瑙²¹、②ラピス・ラズリ²²、③カーネリアン²³などとの同定が見られる。一方、CEB は同定を避け、広く「宝石 (gemstones)」とする。また、Gispén は「緑柱石 (chrysoptase)」とする (115、119)。何らかの宝石類である (Ryle : 33、Westermann : 297、Sarna : 20、関根清三 : 309 他) ことは確かだが、具体的な確定が困難とされる (Westermann : 297、Sarna :

15 新改訳第三版、新改訳 2017、関根清三など。

16 文語訳、口語訳、フランシスコ会訳、関根正雄など。

17 協会共同訳。

18 聖書の世界 (木田献一)。CEV が “sweet-smelling resins”、NIV が “aromatic resin” と、これに類する訳を採る。

19 新共同訳。

20 たとえば、邦訳では新改訳 2017、関根清三、英訳では Stratton、独訳では LUT2017、Westermann、仏訳では PC など。

21 たとえば、邦訳では口語訳、新改訳第三版など、英訳では JPS、KJV、RSV、RV など、独訳では SCH など、仏訳では DRB、LSG、NBS、NEG、SG21、TOB など多数。

22 新共同訳、NAB、NJPS、Speiser などがある。

23 紅色の宝石。この訳語を取るものとして邦訳では協会共同訳、英訳では NJB、RNJB、独訳では EIN、GuNB、ZB など、仏訳では BJ、BFC がある。ほかに、関根正雄が「紅玉髓」と、月本昭男が「紅めのう」と紅色の宝石と同定した翻訳をしている。

20 他) が、近年ではアッカド語サーム「赤」との類推から赤い宝石 (月本 : 91) と考えられている。

この石はヘブライ語聖書の中で、高価な宝石 (ヨブ 28 : 16)、文字を刻むのにふさわしいもの (出 28 : 9 他)、エデンにある貴重な石 (エゼ 28 : 13)、神殿建築の材料の一部 (代上 29 : 2) として使用されている (Skinner : 60 - 61)。

3) 金 (כסף)

ヘブライ語聖書でこの語が使用されるのは 387 例である (CDCH および Even-Shoshan を参照)。ヘブライ語聖書で金は、富を象徴するものの一つ (創 13 : 2、24 : 35、申 8 : 13、王下 20 : 13 他) として言及される同時に、王冠 (サム下 12 : 30、ゼカ 6 : 11 他) や王笏 (エス 4 : 11) など王権を象徴するものを造る際に使用される。

ヘブライ語聖書では知られる金の産地として、ここで言及される「ハビラ (חֲבִילָה)」(創 2 : 11 - 12) の他、「オフィル (אוּפִיר)」(王上 9 : 28、ヨブ 22 : 24、28 : 16 他。王上 22 : 49 も参照) や「シェバ (שָׁבָא)」(王上 10 : 1 - 2、イザ 60 : 6、詩 72 : 15 他)、「パルワイム (פַּרְוִיִּם)」(代下 3 : 6) がある。興味深いことに、パルワイムを除く、これらの金の産地の地域は創世記 10 章の「ノアの息子たちの系図」、いわゆる「民族表」に言及されている。ハビラは①ハムの孫 (7 節) および②ハムの玄孫 (29 節) として、オフィルはハムの玄孫 (29 節) として、シェバは①ハムの曾孫 (7 節) およびハムの玄孫 (28 節) としてそれぞれ語られており、いずれもハムの子孫とされている点で共通している。また、特にハビラ②とオフィルとシェバ②はヨクタンの子孫として並んで登場する (Cassuto : 119、月本 : 91 参照)。

2 - 3. 「四つの川」に関連する語のイメージと含意

ここで「四つの川」に関連する表現がヘブライ語聖書において有するイメージと含意について検討する。ここでは「四つの川」の箇所ですべて重要な意味を担う「エデン」、「園」、「川」、「四」という言葉について見ていきたい。

1) 「エデン (עֵדֶן)」に関するイメージと含意

ヘブライ語聖書にはこの単語が固有名として使用されるのは計 14 回である (CDCH および Even-Shoshan を参照)。このうち、「エデンの園」物語内で 5 回の他、創世記に 1 回 (4 : 16)、イザヤ書に 1 回 (51 : 3)、エゼキエル書に 6 回 (28 : 13、31 : 9、同 16、同 18[2 回]、36 : 35)、ヨエル書に 1 回 (2 : 3) である。

この語はアッカド語で「荒野」「平野」を意味する「エデンヌ」に関連するとされることもある (Ryle : 31、Skinner : 57、月本 : 90 参照) が、聖書ヘブライ語では「飲

喜」「楽しみ」「至福」を意味する語である (Skinner : 57、城崎 : 3、Gispén : 116、月本 : 90 他)。しかし、アッカド語での意味は「エデンの園」物語の描写に合わず (Cassuto : 107、月本 : 90 他)、聖書ヘブライ語での意味が「エデンの園」物語と関連するのか不明である (Wenham : 61、関根清三 : 302 - 303、月本 : 90 他) ので、語源に関する考察は難しい (Gispén : 116、Wenham : 61、月本 : 90 他) とされる。

「エデンの園」物語では、この「エデン」という語が指し示す内容に揺らぎがあり、一方で①園が置かれた地域名 (「エデンにある」園、創 2 : 8) とされるが、他方で②園の固有名 (「エデンの園」創 2 : 15、3 : 24[2 回]、エゼ 6 : 35、ヨエ 2 : 3) として使用されている (関根正雄 : 92、Hamilton : 161、関根清三 : 302 他)。

2) 「園 (גן)」に関するイメージと含意

ヘブライ語聖書でこの語が使用されるのは 41 例である (CDCH および Even-Shoshan を参照)。この語は「エデンの園」物語で 13 回使用される他、雅歌に 9 回、列王記 4 回、イザヤ書 2 回、エレミヤ書 3 回、エゼキエル書 4 回、ヨエル書 1 回、創世記 13 : 10 に 1 回、申命記・ネヘミヤ書・哀歌に各 1 回ある (Even-Shoshan を参照)。この語は耕作のために囲いこまれた場所を意味する (Wenham : 61)。

この言葉では、しばしば使用される表現や用法として、特徴的なものがいくつか見られる。

第一に、神あるいはヤハウエが所有するものである。具体的には、①「ヤハウエの園 (גן יהוה)」(創 13 : 10、イザ 51 : 3)、②「神の園 (גן אלהים)」(エゼ 28 : 13、31 : 8 [2 回]、同 9) という表現が見られる。①「ヤハウエの園」という表現では、創 13 : 10 では滅ぶ前のソドムとゴモラが反映しており「ヤハウエの園のように」と「エジプトの国のように」潤っていたと表現される。また、イザ 51 : 3 では「荒野をエデンのように、荒地をヤハウエの園のように」と、荒野と荒地、およびエデンとヤハウエの園が対比され用いられている。さらに、②「神の園」という表現では、エゼ 28 : 13 でそこで見られるさまざまな宝石と並んで、エゼ 31 : 8 - 9 ではそこに生えるさまざまな木々と並んで神の園が三回使用される。

第二に、2 - 3. 1) で上述したように「エデンの園」という表現が「エデンにある園」を除いて、5 例見られる。また、「ヤハウエの園」と「エデン」と並行で言及される場合 (イザ 51 : 3 他) や「神の園エデン」(エゼ 28 : 13、31 : 9) という用例も見られる。また、荒地果てた土地が回復する様 (エゼ 36 : 35) や、荒廃した後との対比で以前の国 (ヨエ 2 : 3) を描くのに「エデンの園のように」という表現が使用されることもある。

第三に、「エデンの園」物語を除くと、雅歌での用例が突出することである (全 41

例中9例)。雅歌では多くの植物が言及される「果樹園」のイメージであり、そこで主人公の男女が互いに愛を語り合っている。これらの点で「エデンの園」物語との対比をなし、聖書学の研究でも両者をともに扱った研究が見られる（たとえばトリブル他）。

以上のように、「園」という語は、①神ヤハウェが所有する特別な場所、②果樹園のイメージで語られる言葉であり、③エデンという言葉との繋がりも強い。つまり、「エデンの園」物語ではそのような神ヤハウェの所有する特別な場所の果樹園として語られているのである。

3) 「川 (נָהָר)」に関するイメージと含意

ヘブライ語聖書でこの語が使用されるのは119例である（CDCHを参照）。ヘブライ語聖書では川として、創2：14であげられているティグリス川やユーフラテス川の他、「ナイル川 (יַאֲרֵן)」(創41：1他)や「ヨルダン川 (יַרְדֵּן)」(創32：11他)「アバナ (אֲבָנָה)」や「パルパル (פַּרְפָּר)」という「ダマスコの川 (נְהַרוֹת דַּמָּשֶׁק)」(王下5：12)、「ケバル川 (כְּבַר)」(エゼ1：1)などの川が言及されている。

ヘブライ語聖書で川は、しばしば①地理的な境界線を示す（ヨシュ1：4、士4：13他）ほかに、②防御に使用されたり（ナホ3：8）、③移動の手段に用いられしたり（イザ18：2）、④飲用に供されたり（出7：18）、⑥魚釣りをしたり（レビ11：9参照）、⑦沐浴に用いられしたり（出2：5）、⑧神顕現の場となったり（創32：22－32）している。

この נָהָר という語は、たとえば、涸れることがないことを前提にしそれが涸れることによるヤハウェの裁きを象徴したり（イザ19：5、66：12、詩74：15他）、救いのときのエルサレムの様子を象徴的に表現したり（イザ33：21、詩46：5他）、あるいは、出エジプトでの奇跡を象徴的に示したりするのに用いられる（詩78：15－16）。さらに、ヘブライ語での語彙は異なるが、「流れ (נָהָל)」は正義（アモ5：4）や、知恵の源（箴19：4）を表わすのにも用いられる。

以上見たように、ヤハウェの裁きや救済を示したり、救いのときのエルサレムを描写する際に、象徴的に用いられている。

4) 「四 (אַרְבָּע)」に関するイメージと含意

ヘブライ語聖書でこの語が使用されるのは324例である（CDCHを参照）。ヘブライ語聖書では「四」という数字は、具体的な数字を表わす他、象徴的に用いられることも多い。たとえば、ヤハウェが民を罰するものは「四種の罰」（エレ15：2－3）であり、エゼキエルが見た幻にはヤハウェの玉座を守護する存在（エゼ1：26－28）として「四つの生き物」（エゼ1：4－14）が語られている。このように、「四」とい

う数はヤハウエの裁きや、ヤハウエの臨在を象徴するのに用いられる。

また、「(東西南北という) 四方」(代上 9:24) を表わすのみならず、「天の四方」(エレ 49:36、ゼカ 6:5 他)、「四方からの風」(エレ 49:36、エゼ 37:9 他)、「地の四方」(イザ 11:12、エゼ 7:2 他) など「四」という数字を用いて、地上・天上を問わず、全方角・全世界を象徴するのにも使用される(城崎:3 およびフォン・ラート:118 を参照)。また、古代オリエント世界でも、世界を四方に流れる四つの川の表象が見られる(ケール:120、図 153a)。

以上見たように、「四」という数はヤハウエの裁きや臨在を象徴すると同時に、全方角・全世界を象徴するために用いられている。

3. 文学的機能

以上の議論を踏まえて、10 – 14 節に描写される「四つの川」をめぐる地誌的情報が有する文学的機能について検討したい。

第一に、エデンについての地理や地誌に関する情報が読者に示されることから、語り手の知識が披露されることである(Stratton:34)。このことで、語り手は物語世界について読者を超越する十分な知識を有していることが明らかになり(Stratton:34)、未知の川に貴重な産物が見られることで、読者の関心をかき立てることである(Stratton:34)。

第二に、語り手の語りの巧みさを例示することである(Stratton:34)。10 – 14 節では、順にピション、ギホン、ヒデケル、ペラトが言及される。これらは二つの組をなし(Westermann:296、Turner:19)、ピションとギホンは川としては知られないものであるのに対し、ヒデケルとペラトは聖書でも良く知られたものである(Westermann:296)。さらに、ピションは川としてのみならず名称としてもヘブライ語聖書内で他で言及がないものであるのに対し、ギホンは川としては言及されないが泉として知られるものである。またペラトは「特に抜きんでて川というもの」だとされるのに対し、ヒデケルは用例が全二回と少ない。このように、この川は未知のものから周知のものへと順に並べられているのである(Stratton:34)。しかも、ペラトを除くピションからヒデケルには流域地域が併せて言及され、さらに最も情報の乏しいピションには流域地での産物まで情報が与えられるのである。このように読者の持つ情報の乏しいものから多いものへと順に叙述する点で、語り手は語りの巧みさを例示しているのである。

第三に、「エデンの園」物語という神話的な物語世界に信憑性を与えることである(O'Conner:50 参照)。この「エデンの園」物語では、神ヤハウエは土をこねて人を造り、

鼻に息を入れることで人を生ける者とするなど、「素朴」で「写實的」な語りをしているが、ヘブライ語聖書にとって馴染みの深い二つの大河を組み込むことで、物語に対する具体性がそなえられる（関根清三：310、O'Conner：50）ことになり、語りの信憑性が付与される（関根清三：310、Stratton：34）のである。

第四に、「エデンの園」物語で語られる「四つの川」の叙述には語り手が考えるエデンを取り巻く世界観が反映されており、これは古代の地理的知識を反映した（城崎：3、月本：92）ものとも、あるいは語り手が創りあげた神話的な世界観を反映した（Hamilton：168）ものとも考えられる。つまり、この箇所に含まれる地名についての語り手による印象や、語り手が有する世界観を読者に提示するのである。

第五に、エデンの園を地理的に位置づける（関根正雄：95、フォン・ラート：119）ことである。すなわち、具体的な場所として、エデンの園（や「エデンの園」物語で語られる物語世界）を地理的な場所として確定させようと読者に促すのである。しかし同時に、使用される地名の中に、場所を特定することが困難な地名や未知の地名が含まれることで、その源泉であるエデンの位置を確定させることを困難にさせる（O'Conner：50 参照）。この結果、この箇所により地理的な関心を惹起され場所を具体的に位置づけようと促される一方で、そのような特定を困難にされるという両義的な態度に直面されるのである。

第六に、古代から現代にいたるまで西アジアの乾燥地域では真水は動植物にとって欠くことのできないものであり（フォン・ラート：119、月本：92、O'Conner：50）、生命力を示すもの（月本：92）と理解される。つまり、エデンから発する生命力の源である水が川として世界を潤すことは、①生命（月本：92）、②豊穡（城崎：3、関根清三：310、月本：92）、③神からの祝福（関根清三：310）を、それぞれ象徴する。

第七に、上述した2－3.4）で見たように、ヘブライ語聖書でも古代オリエント世界でも「四」という数が世界を象徴するものであった。このことから、四つに広がる川は世界四方へと広がることを意味し（フォン・ラート：118、月本：92 他）、その源泉であるエデンは世界の中心となる（月本：92 参照）。

第八に、この「エデンの園」物語の後には、「カインとアベル」（4：1－16）、「ノアの洪水」（6：5－9：17）、「バベルの塔」（11：1－11）などの物語が続いて語られる。中でも、「ノアの洪水」では神ヤハウエにより全地が水によって覆われたことが叙述される。このような大規模な水害は川の流れなど地形を大きく様変わりさせることを予想させる。しかし、ここで確実に同定し得る地名はメソポタミアのものであり、ヘブライ語聖書を通して広く知られるものである。このことから、図らずも「ノアの洪水」物語において語り手が語るような洪水が起きなかったこと、あるいは、洪水が世界を覆うといったものでなく、川の流れや地形を大きく変えることがないような規模

であったことを露呈するのである。

以上のように、創世記 2 : 10 - 14 は語り手の能力や信頼性を提示するのみならず、象徴的な表現によって物語世界を豊かなものにし、「エデンの園」物語に続く物語での語り手について考える一助となるなど、幅広い文学的機能を有するのである。

まとめと展望

本稿では、創世記 2 : 10 - 14 に語られる地誌的情報が有する文学的機能について論じてきた。その結果、次のような文学的機能を有することが明らかになった。①物語世界に関する語り手による十分な知識を示しており、それにより読者の関心が喚起される。②語り手の熟練度を示している。③語り手に神話的な物語世界に対して、読者の信頼性を付与する。④地名に対する語り手による印象と語り手が有する世界観を読者に示す。⑤既知の地名と未知の地名の両方が使用されているため、読者はエデンが具体的な地域として特定するのが困難になる。⑥西アジアでは水が貴重であるので、エデンから四つの川が流れ出るとは、生命、肥沃さ、そして神からの祝福を象徴する。⑦「四」という数字は全世界を含意するため、「四つ」の川の源、つまりエデンは全世界の中心となる。⑧全世界を襲った大洪水がエデンの物語の後に語られているが、洪水が川の流れなどの地形を変えることができなかったか、あるいは、発生しなかったことを明らかにする。以上のように、創世記 2 : 10 - 14 で語られるエデンに関する地誌的情報は読者の読みに幅広い影響を与え得る多様な文学的機能を有していることが明らかになった。

最後に、ヘブライ語聖書物語において地理に関する情報が読みに与える機能について展望しておきたい。ヘブライ語聖書では物語に地名が言及される場合が少なくない。たとえば、ルツ記のベツレヘム (1 : 2 他) や、ヨブ書のウツ (1 : 1)、ヨナ書のタルシシュ (1 : 3) やニネベ (1 : 2 他) などがあげられる。こうしたヘブライ語聖書の物語において地名が語られる場合、物語上の場面設定としてそのような地名を必要とするとともに、そこには語り手が想定する世界観についての情報と、地名に対するイメージが垣間見られる。

また、物語において場所が地理上で決定できないものもある。その最たるものは、エジプト脱出の経路や律法が授与された山であろう。特に、律法授与が行われた山は物語の中で、神の山 (出 24 : 13)、シナイ山 (出 19 : 20)、ホレブ山 (出 33 : 6) と一貫せずに名称が揺らぐ。これまでの聖書解釈の多くはこれら語られる地理的情報をもとにテキストを資料に分割することで矛盾を解決し、あるいは場所を確定しようとしてきたが、本稿で論じたように位置を決定することができないことで生じる文学的

機能について検討することで、ヘブライ語聖書が有する文学的側面や語り手が考える世界観を明らかにする可能性を有する。

以上のように、「四つの川」についての地誌的な情報は物語において「何の意味も持たない」のではなく物語世界や読みを豊かにするものであり、本稿で行ったようにヘブライ語聖書物語において使用される地名が有する文学的機能に注目して考察することは他の聖書物語の読みにも援用し得る解釈の可能性を秘めているのである。

【付記】 本稿の骨子は「エデンの園の四つの川 — 創世記 2 章の地理的情報の文学的機能 —」と題して、2020 年 9 月に駒澤大学で行われる日本宗教学会において発表予定であったが、コロナ禍の影響を受け発表にかえて要旨を同学会の別冊要旨集に掲載予定である(2020 年 9 月 20 日提出済み)。本稿はこれをもとに、大幅に構成を変更し、加筆したものである(2020 年 11 月末記)。

引用文献

- ケール、O. 2010 『旧約聖書の象徴世界 — 古代オリエントの美術と「詩編」—』(山我哲雄訳)、教文館。
- 城崎進 1966 「旧約釈義 創世記 3」、『聖書雑誌』(日本基督教団出版部) 3 号、1 - 6 頁。
- 関根清三 1994 「アダムの神話の象徴論的解釈」『旧約における超越と象徴 — 解釈学的経験の系譜』東京大学出版会、283 - 370 頁。
- 関根正雄 1984 『創世時代講解 (関根正雄著作集 13)』新地書房。
- 月本昭男 1996 『創世記 I (リーフバイブルコメンタリー)』日本基督教団出版局。
- トリプル、フィリス 1989 『神と人間性の修辞学 — フェミニズムと聖書解釈 —』(河野信子訳) ヨルダン社。
- ヨセフス、フラウィウス 1982 『ユダヤ古代誌 I - II』(秦剛平訳) 山本書房。
- フォン・ラート、ゲルハルト 1993 『創世記 一一二五章一八節 (ATD 旧約聖書註解 1)』(山我哲雄訳) ATD・NTD 聖書註解刊行会。
- Clines, David J. A. (= CDCH) 2009 *The Concise Dictionary of Classical Hebrew*. Sheffield: Sheffield Phoenix Press.
- Cassuto, U. 1961 *Commentary on the Book of Genesis, Part One: From Adam to Noah*. trans. by Israel Abrahams, Jerusalem: The Magnes Press.
- Cline, Eric 2009 *Biblical Archaeology (A Very Short Introduction 217)*. New York: Oxford University Press.
- Even-Shoshan, Abraham (ed.) 1990 *A New Concordance of the Bible: Thesaurus of the Language of the Bible Hebrew and Aramaic Roots, Words, Proper Names, Phrases and Synonyms*. Jerusalem: "Kiryat Sefer" Publishing House.
- Gispén, W. H. 1966 "Genesis 2: 10-14," in: *Studia Biblica et Semitica: Theodoro Chritiano Vriezen qui munere professoris theologiae per xxv annos functus est, ab amicis, collegis, discipulis dedicata*.

- Wageningen: H. Veenman & Zonen, pp. 115-124.
- Hamilton, Victor P. 1990 *The Book of Genesis: Chapters 1-17* (The New International Commentary on the Old Testament). Grand Rapids, MI: William B. Eerdmans Publishing Company.
- O'Connor, Kathleen M. 2018 *Genesis 1-25A* (Smyth & Helwys Bible Commentary). Macon, GA: Smyth & Helwys Publishing.
- Raddy, Yehuda T. 1982 "The Four Rivers of Paradise," *Hebrew Studies* 23: 23-31.
- Ryle, Herbert E. 1914 *The Book of Genesis: In the Revised Version with Introduction and Notes* (The Cambridge Bible). Cambridge, UK: The Cambridge University Press.
- Sarna, N. N. 1989 *Genesis* (JPS Torah Commentary). Philadelphia: The Jewish Publication Society.
- Skinner, John 1930 *Genesis* (International Critical Commentary). 2nd ed., Edinburgh: T&T Clark.
- Speiser, E. A. 1967 "The Rivers of Paradise," in: J. J. Finkelstein & Moshe Greenberg (eds.), *Oriental and Biblical Studies: Collected Writings of E. A. Speiser*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, pp.23-34.
- Stratton, Beverly J. 1995 *Out of Eden: Reading, Rhetoric, and Ideology in Genesis 2-3* (Journal for the Study of the Old Testament Supplement Series, 208). Sheffield: Sheffield Academic Press.
- Turner, Laurence A. 2009 *Genesis* (Readings: A New Biblical Commentary). Sheffield: Sheffield Academic Press.
- Wenham, Gordon J. 1987 *Genesis 1-15* (The Word Biblical Commentary). Waco, TX: Word Books.
- Westermann, Claus 1983 *Genesis 1-11* (Biblicher Kommentar Altes Testament I/1). Neukirchen-Vluyn: Neukircher Verlag.

【Abstract】

Four Rivers in Eden:

Literary Functions of the Topographical Information in Genesis 2: 10-14

IWASAKI Daigo

This article discusses topographical depictions in Genesis 2: 10-14, which seems to interrupt the flow of the story. Therefore, most of scholars think these verses secondary and almost disregard it on their own interpretation. This essay focuses on literary functions of this passage. Firstly, this treatise surveys three notable studies dealing with these verses as follows: E. A. Speiser, W. H. Gispen, and Y. T. Raddy. Secondly, this paper examines each of the topographical descriptions, products of the four rivers, and implications related to this account. Finally, this article argues literary functions on this depiction. This part has many literary functions as follows: (1) This description shows the narrator's knowledge on the narrative world, and as a result, draws readers' attention. (2) This pericope illustrates the narrator's skillfulness. (3) This passage provides the narrators with the readers' reliability of "mythical" narrative-world. (4) This account informs the readers of both narrator's impressions on the place-names and the world view the narrator has. (5) This depiction uses both known toponyms and unknown ones, so it makes difficult for the readers to identify Eden the real region. (6) This part symbolizes life, fertility, and blessing from God, because water is indispensable in West Asia. (7) Number "four" implies the whole world, so the source of their "four" rivers, i.e. Eden, sets central of the whole world. (8) Though the Deluge, which attacks all over the world, is told after the Eden narrative, this description exposes that the Flood couldn't change river-basins, or did not arise so much as the Bible writes. In conclusion, this paper shows recapitulation and suggests possibilities of further research by paying attention to literary functions of place-names or topographical depictions.